

妊婦の妊娠に対する取り組みの姿勢

—現代妊婦が取り組もうとしている妊娠によって生じる出来事

看護部	松高早紀江
仁淀病院	○近藤ひろ美
西南病院	岡田 順子・矢田 典子
国立高知病院	吉本 妙・北村亜希子
高知市民病院	真野 晴江・北村 明子
高知赤十字病院	本多あんり・尾崎 暢希
県立中央病院	大塚多賀子
安芸病院	有光 由美
高知女子大学	岸田 佐智

I. はじめに

妊娠分娩育児は生理的現象といえども、妊婦に生理的・心理的・社会的に多様な変化をもたらすため、危機的状況として捉えられやすい。現在の妊婦たちは、少子化や情報の氾濫、核家族化によるサポート源の減少という環境の変化の中で、妊娠期に生じる出来事をどの様に感じ、どのように取り組んでいるのであろうか？

看護者の提供している教育プログラムや保健指導の状況はよく報告がなされているが、現在のストレス対応に弱いとされる妊婦たちの現状を明らかにしている文献はみあたらなかった。そこで、現代妊婦の妊娠への取り組みの状況を明らかにすることで、妊婦に対する新たな看護介入の方法を知る手がかりになるのではないかと考えた。今回は妊娠によって取り組まなければならない出来事に焦点をあて、分析したので報告する。

II. 本研究の概念枠組み

本研究の概念枠組みは「妊娠」「分娩」「育児」についての文献から、取り組みの姿勢に関連すると思われる項目を抽出分析し作成した。本研究では、妊婦の取り組みの姿勢とは、その人が妊娠したことによって生じた状況や将来生じる状況に対して、自らの意識や意図から何か行動しようとしていることと考えた。この取り組みの姿勢には、妊娠、出産、育児に向けて自己調整しながら行動し体験の意味を見出す過程と、周囲に期待することであり、「主体性」「計画性」「心」「知識」「行動」「体験の意味を見出す」「期待」の7要素からなる。この場合体験は分娩時の体験をさしており、分娩に

より生じた心の状態を満足感とした。このような体験を通して満足感に影響を与え、結果として母親の成長があると考えた。また「風潮」は、取り組みの姿勢に影響を及ぼすものとした。(図1)

III. 方法

対象：本研究の目的と協力内容を説明し同意が得られた妊娠26週から36週の妊婦21名。

データ収集期間

平成9年4月～平成9年10月

データ収集方法

半構成的インタビューガイド

に基づいて30～60分の面接調査をした。

分析方法

まず面接によって得られた情報を逐語的に掘り起こした。そして妊娠に対する取り組みに関連した現象を抽出し、KJ法による分類を行った。

IV. 結果および考察

1. 対象者の属性

対象の年齢は22才から38才で平均29.6才であった。妊娠週数は24週から36週、初産婦10名、経産婦11名であった。(表1)

2. 妊婦が取り組もうとしている妊娠によって生じる出来事

妊婦は<妊婦個人に関わる出来事><日常生活に関わる出来事><他者との人間関係に関わる出来事><将来おこりうる出来事>という4つの出来事に対し、取り組もうとしていた。

1) 妊婦個人に関わる出来事

これには『身体』『心』『自己像』という、妊婦の身体的側面や心に生じる出来事がある。

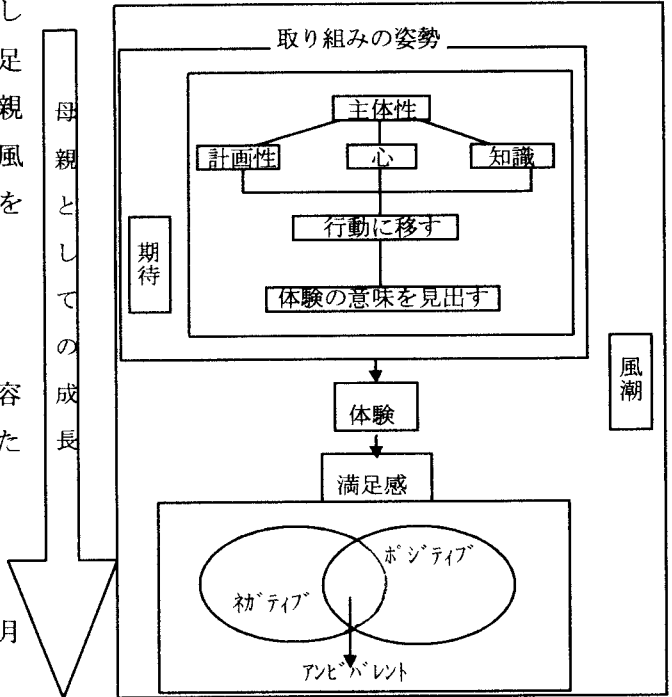


図1 本研究の概念枠組み

『身体』

妊娠することによって生じる身体の性質や状態などに、妊娠する前と違いが現れる状態である。妊娠による外見的变化としては、腹部増大による変化・体重増加を、生理的变化としては、つわり・胎動実感の思いを、中には変化のない体を述べていた。

表 1 ケースの属性

ケース	年齢	Para	妊婦週数	家族構成	職業	学歴	備考
1	31	1-1-0-0	33w6t	夫・夫の母	無		
2	35	3-1-2-2	30w	夫・子2人	教師	大卒	
3	24	3-3-0-0	31w	夫	看護婦	高卒	
4	25	1-1-0-0	33w0t	夫・実母	看護婦	看護学校卒	
5	30	0-0-0-0	32w0t	夫	理容業手伝	高卒	
6	31	1-0-0-0	27w	夫	エドホレクター	高卒	前回流産
7	28	0-0-0-0	34w	夫	無	短大卒	HCV+, 人工授精
8	32	1-0-1-1	28w	夫・子1人	無	大卒	喘息
9	29	1-0-1-1	26w	夫・子1人	助産婦	助産婦学校卒	
10	28	1-0-1-1	30w5t	夫・子1人	ピアノ教師	大卒	
11	38	2-1-1-1	36w	夫・子1人	看護婦	高卒	
12	24	0-0-0-0	34w	夫	無	大卒	
13	35	3-1-2-2	31w	夫・子2人	助産婦	助産婦学校卒	
14	31	2-1-1-1	35w	夫・子1人	無	短大卒	
15	22	0-0-0-0	36w6t	実母1人	無	高卒	
16	30	1-0-1-1	34w2t	夫・子1人	無	短大卒	
17	35	5-3-2-2	27w1t	夫・子2人	看護婦	看護学校卒	
18	23	1-0-1-1	24w	夫・子1人	無	中卒	
19	25	0-0-0-0	30w	実母	無	中卒	妊娠中離婚
20	34	4-2-2-1	34w	夫・子1人	無	短大卒	死産, 流産
21	31	0-0-0-0	28w	実母・夫	自営業	高卒	

ケース2は、「サッと動いたらお腹が痛くなったりするんですよ」と腹部緊満が刺激となり「だから、ちょっとのんびり歩いてしまっ」と、ゆっくり動くという取り組みをしている。

『心』

妊娠することによって生じた心の状態が以前と異なっていることである。妊娠によって様々な情緒的な変化を味わっている。それは多くの場合ホルモン分泌の変化により必然的に生じる場合もあるが、妊娠をすることで変化した日常生活や対人関係にも影響しているものがあつた。具体的には、妊娠する事によって神経質になったなど「妊娠により情緒的に不安定になった」や、「他者との付き合いに対して内向的になった」、「分娩など未知の体験に対する不安」などが挙げられており、この刺激に対してケース20は心を落ち着かせようと「息子が寝てから本を読んだりとかいうのはある」という取り組みをしていた。

『自己像』

妊娠という事実を通して今までの自己が、胎内に児を保有している事を実感し、母親としての自己が芽生え変化している。妊娠前とは異なり、母親としての側面を感じるようになることで、新たな自己を見出している。従って、今までの自分や、母親としての自覚をもつ自己を見つめ、新たな自分を受け止めようとしている。ケース10は、「今までにない愛情みたいなものを、お腹の中にいるときから感じて、今までにない感情、い

とおしいというか…、があったんですね。」や、ケース12「意識はまだないと思うが、漠然とした実感がある。」、ケース15「しっかりしていかと今までのままじゃ」というように、戸惑いながら今までと異なる自己を認め、責任感を育てている。

2) 日常生活に関わる出来事

これは『生活』『嗜好』『仕事』『情報』『社会的手続き』という日常生活に関わる出来事である。

『生活』

生活パターンや行動範囲、生活手段などの生活にまつわる出来事である。妊婦は妊娠したことにより、行動範囲が狭まること、それまでの生活パターンが変化すること、逆に今までと生活パターンが変わらないことが刺激となり、それに対して何らかの取り組みをしようとしていた。ケース4は妊娠してからも「仕事を中心に生活していた」と話しており、「夫より自分の仕事が遅い」「家事なんかにしても自分の母親にまかせきりにしていた」という、今までと同じ生活パターンが刺激となっている。そして「子どもができれば、きちんとした時間に帰ってきて、子どもが保育園から帰ってくる時間にはいつでも居れるような家庭を作っていきたいなあということで、今後の仕事のことについてすごく考えるようになりました」と、生活をする上での仕事の調整を考えていくように変化をしている。

『嗜好』

嗜好には、妊娠前からの習慣であった喫煙がある。ケース21は、今まで喫煙が日常生活の中で習慣となっていたが、その嗜好が刺激となり「(煙草を)やめないかな」と考える、取り組みをしていた。

『仕事』

妊娠する事によって、これまでの仕事内容や仕事時間に負担を感じたり、産後もその仕事を続けるか迷う事から、妊婦は転職や休職、軽い仕事への変更などを考えている。ケース9は「やめたくないけど、仕事自体は。けれどやめざるを得ない環境になるかもしれないし、保育所も夜勤時預かってくれる回数決まってるし、3歳までしかみてくれないし、また他の保育所となったらね。でね、実家が遠いから、頼れる者もいないとなったら、それはすごく考えるしね。正直言って転職なんかもね。」と話していた。

『情報』

妊娠したことにより、周囲から様々な情報が入ったり、逆に情報が得られない状況から新たな知識を得ようとしたり、疑問を明らかにしようとしていた。ケース15は「近所の人に相談してもみんなバラバラなんですよ。だから雑誌とか見た方が…」と話してい

る。その他、人には聞きにくいので雑誌・本を読んで調べたり毎月雑誌を買っている、図書館に行って調べるという熱心な人もいる反面、自分では何もせず周囲の人（出産経験者、家族、医療スタッフなど）に依存するというケースもあった。

『社会的手続き』

妊娠した時点で婚姻していない妊婦は、結婚という手続きをふんでいないことにこだわりがある。ケース1は「絶対結婚してからの出産という形で“できちゃった結婚”は絶対いやと思っていたのに、間違うてしもうて…」と言い、また新婚旅行に無理をしても行こうという行動をとっている。

3) 他者との人間関係に関わる出来事

これは『児』『上の子』『夫』『周囲の人間関係』『支援者』という、妊婦をとりまく人々との関係に関わる出来事である。

『児』

妊婦は、胎児という存在によって、胎児との新しい関係が生じてくる。ケース12は、「やっぱり出てくるとすごい、ああ居るんだなって、毎日どんな時も思い出すっていうか、それまでは、やっぱり、こうすごく自分の体調の変化がある時に、ああ妊娠してるんだって思うんだけど、あのお腹がやっぱり出てきてから凄く、もう何か実感がわいてきたって言うか…」と、腹部の増大によって胎児の存在を一層実感し、健康で元気な子どもへの希望を持っていた。

『上の子』

妊娠により上の子の態度や言動が変化し、上の子と自分との関係や家族関係が今までと異なる事に対して、上の子へのかかわり方を考えていることである。妊娠により上の子の態度や言動の変化として、今までと違って甘える、赤ちゃん返りをする、わがままになる、やきもちをやく等の変化に母親は気がついており、それに対して何らかの対応を考えている。ケース9は「小さいながら子どもも、お母さん赤ちゃんがいるんだからみたいな感じで守ってくれるようなところがあるんじゃないか」と述べて、上の子の自分に対する態度の変化を察知している。また、自分が分娩のために入院中、夫が病気がちの上の子に対して、ちゃんと面倒を見るかどうかに関して気遣い、その育児の様子を指導しようと考えたりしている。これは、入院時という自分が家庭にいない時の上の子への対応までも考えている。

『夫』

夫は一番身近な存在で、妊婦は協力や精神的サポートをしてくれる存在と認識している。夫の協力は些細なことでもうれしく思い、精神的に落ち着くと述べている。ケース

9は「もうちょっと妊婦であることを気遣って欲しい。せめてやさしい言葉だけでもいいから」と、非協力的な夫に対して、せめて言葉がけだけでもして欲しいと願っている。また、夫からの希望は妻の体を考えた家族計画や、立ち会い分娩、ビデオ撮影、性別と具体的な希望が多かった。

『周囲の人間関係』

妊娠する事によって、実父母、義父母また従兄など妊婦を取り巻く人々との、対応や言動など関係性の変化が刺激となり、その関係性を調整したり精神的な安定を得ようとして家事など実生活での協力を得ようとしていた。ケース12は「週末だけですけど帰ってきたらやっぱりまあ『生まれると一番大変になるから、今はじゃあゆっくりしときなさい』っていう感じで家事も殆どしてないですし、全部何か頼ってます」と話している。

『支援者』

支援者とは、妊娠や分娩に関して血縁や婚姻関係以外の人で支援をしてくれる人という。妊娠中に離婚したケースが1例あり、実母も体が弱いため自分が支援すべき対象であり、支援者としては前の仕事場の同僚である近所のおばちゃんを挙げていた。

4) 将来起こりうる出来事

これは『分娩』『育児』『将来の計画』という、将来必然的に起こると考えられる出来事である。

『分娩』

分娩を想定した時に生じる感情や陣痛のイメージにまつわる出来事である。妊婦は分娩を想定した時、無事に生めるかという不安や恐怖、痛いというイメージが刺激となり、それに対し何らかの取り組みをしようとしていた。ケース20は「やっぱりお産は不安です」と話し、分娩に対する不安が刺激となっている。そして「うん、だからもっと自分でお産についても勉強したら、本とか読んだらいいんじゃないかと思うんですけど、読んだら読んだで不安になりそうなので、余計やっぱり助産婦さんに相談するのがいいかなって、その時」と、不安を解消するために専門家から知識を得ようとしていた。

『育児』

妊婦は、育児に対する心構えや子どもへの理想を持ち、母乳栄養について考え、育児の準備をしている。ケース6では「わがままにはしたくない、子どもにも英語は困らないように小さいうちから習わしたいと思っています。…子どもにも一人で泳げるようにしたいと言っていました(夫が)。」という思いがあった。現在の生活環境を見きわめることにより、より育児環境を考慮したり育児用品の準備の必要性や経済面を考慮し、

綿密に計画的に準備を進めている。また、ケース5は「なるべくなら母乳が出てもらいたいっていう感じ。こないだ母親学級で習いました。こうお風呂に入った時（お乳の手入れ）ちょっとやってるような状態ですけど」と話している。

『将来の計画』

将来の計画には、生まれて来る子どもの性別や子どもの数がある。今回の妊娠で子どもの数は計画通りであっても、性別に不満があり、もう一人出産してみるかどうか悩み考えたりするケースがあった。

V. おわりに

妊婦は妊娠によって生じる<妊婦個人に関わる出来事><日常生活に関わる出来事><他者との人間関係に関わる出来事><将来おこりうる出来事>に関する合計16項目の事項に対して何らかの取り組みをしようと考えていた。こうした多くの出来事に対して取り組まざるを得ないことは、やはりストレスな状況であろう。今後は、この分析を更に深め、妊婦の取り組みの内容や、取り組みの姿勢について明らかにしていきたいと考えている。

参考文献

- 1) 新道幸恵、和田サヨ子：母性の心理社会的側面と看護ケア，医学書院，p9，1990.
- 2) 鈴木里加他：子どもを産むことに関する調査，母性衛生，37(1)，p4 - 10，1996.
- 3) 籠伊久美子：「不安」に関する文献学的研究 分娩経過に伴う産婦の不安，三重県立看護短期大学紀要15巻，p1 - 7，1994.
- 4) 南部春生：経産婦のもつ育児不安，周産期医学，p618 - 623，1994.
- 5) 深津千賀子：初産婦のもつ育児不安，周産期医学，p613 - 617，1994.
- 6) 小林臻：初妊婦のもつ妊娠・分娩に対する不安，周産期医学，p607 - 612，1994.

〔平成10年2月5日，高知市にて開催の第31回四国母性衛生学会
で発表〕